

収蔵品で語る宮代の民俗1



ハレの日の風景



平成 19 年

1 月 13 日 (土)

～4 月 22 日 (日)

宮 代 町 郷 土 資 料



ごあいさつ



生まれてから亡くなるまでの一生の長さは、人によって異なっています。私たちの国は長寿国として世界に名を連ねていますが、これは生活環境の改善、医療技術の向上などといった、さまざまな分野での技術や性能の向上によって、より安心して快適な生活を送ることが出来るようになったからであるといえます。

しかし、科学技術などのめざましい進歩の中においても、人々は長く幸せな一生をおくることが出来るようにと折々に神仏の加護を願い、互いに強いつながりを持ちながら助け合って暮らしてきました。

今回の展示では、人の一生において節目節目におこなわれる行事、いわゆる「人生儀礼」をテーマに取り上げてみました。展示した資料は、昭和 30 年代より前のものになります。結婚などの祝儀を自宅で行い、地域の互助によって行われていた時代の資料に、みなさんはどのような願いやメッセージを読み取られるでしょうか。

最後に、これらの貴重な資料をご提供くださいました皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 19 年 1 月

宮代町教育委員会

教育長 桐川弘子

1、本書は、平成 19 年 1 月 13 日から 4 月 22 日まで開催される企画展

「収蔵品で語る宮代の民俗 1 ハレの日の風景」の展示図録です。

2、展示の企画・構成及びポスター・図録の執筆・編集・デザインは、当館学芸員横内美穂が担当いたしました。

なお、展示は資料館職員が協力して行いました。

3、本文中の敬称は省略させていただきました。

4、図版の順序は展示順序を示すものではなく、図録構成も展示構成とは異なります。

5、本企画展の開催にあたり、下記の方々に資料のご提供、ご指導、御協力をいただきました。ここに記し、感謝申し上げます。(五十音順・敬称略)

青木 千代子・青木 秀雄・新井 隆夫・岡本 とし子・折原 静佑・折原 一・金子 和生・小島 雅郎・島村 宗作

関根 勲・高畑 博・戸田 義一・中村 清子・中村 啓子・中村 ケエ子・中村 佐登志・中村 多計志・中村 忠男
成田 一男・成田 良夫

「ケ」と「ハレ」

昔の人は、「普段の日」という意味の言葉で「ケ」という言葉を用いていました。「ケ」の日には、農作業など野良仕事をするときの野良着（仕事着）としてノラジバン（野良襦袢）やモモヒキ、モンペなどを着用しました。野良着は普段着を兼ねていることが多く、たいていは朝起きてから晩に風呂に入るまで、一日の大半を野良着で過ごしました。野良着を含め、普段着は木綿の縞や緋で仕立てられることが多かったようです。

このような一年を通じた「ケ」の日の間に、「ハレ」の日がありました。「ハレ」とは、「何らかの儀礼のある折り目の日」という意味で、社寺や村などにおける「祭礼」、農耕における「農耕儀礼」、そして出産や冠婚葬祭など、人の一生における「人生儀礼」があげられます。こうした「ハレ」の時には普段着ではなく、正装・礼装・式服といった意味合いの「晴れ着」を着用しました。「晴れ着」は、身を清めて「ハレ」の日を迎えるといったような意味があります。そのため、もともとは「晴れ着」の色は白が基調色であったとされています。



1.



3.



5.



7.

	資料名	年 代	寄贈者
1	ノラジバン		青木 千代子
2	ノラジバン		青木 千代子
3	モンペ		青木 千代子
4	モンペ		中村 ケエ子
5	よそ行き着（銘仙）		高畑 博
6	よそ行き着（地縞）		折原 一
7	子ども用羽織		高畑 博
8	木綿糸		関根 勸
9	絹糸		（参考展示）
10	東京仕立 和服裁縫全集	昭和 10 年頃	折原 静佑

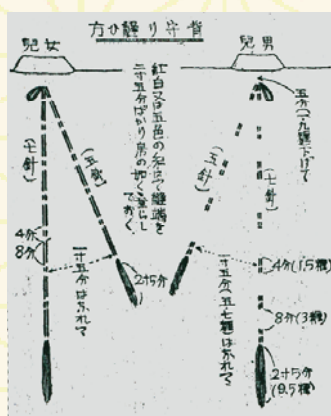
誕生の風景

「七歳までは神の子」という言葉があります。この世に生を受けて成長していく過程の中で、7歳になるあたりまでは心身ともにまだ安定した状態ではありません。そのため、幼い子どもは神様から預かった大切な命であると考え、神仏の加護を願い、周囲の人々の助力を受けながら大切に育てるという姿勢を示した言葉なのでしょう。

生まれた子どもには、いくつかの儀礼が待っています。オシチヤ（お七夜）、セッチンマイリ（雪隠参り）、ウブアケ（お宮参り）などです。その後、お食い初め、初節供、初誕生、初山などがあります。そして、数えて7歳になったときに帯解の祝い（現在の七五三）がおこなわれます。帯解とは、子供用の仕立てであった着物が大人と同じ仕立ての着物になることです。この帯解の祝いをむかえることにより、こどもから大人への第一歩を歩み始めたのです。



11・12



背守りの縫い方
(裁縫の書籍より)



14.



13.

背守りのある産着

新生児の産着は一つ身仕立てであったため、背中には縫い目がありません。そのため「背中に目がないので、魔物がつきやすい。」と考えられました。背中にたくさんの目を付け、病魔などの魔物に背後から襲われないために、背中にお守りとしてたくさんの縫い目をいれたものが「背守り」です。

「背守り」には紅白や五色の糸を使われましたが、布と同じ糸を使うこともありました。また、糸のかわりに布で押し絵のように施されることもあったそうです。



15.



16.



17.

	資料名	年 代	寄贈者
11	産着（肌着）		高畑 博
12	産着（肌着）		高畑 博
13	産着（祝いで着 / 男児）	昭和 28 年	青木 秀雄
14	産着（祝いで着 / 女児）	昭和 30 年	青木 秀雄
15	産着（祝いで着）3 点揃い	昭和 29 年	成田 一男
16	産着（祝いで着）2 点	昭和 24 年	戸田 義一
17	初山のうちわ	昭和 30 年代	島村 宗作
18	産着納受并諸入用覚帳	嘉永 5 年 6 月 25 日	新井 隆夫
19	美弥紐解御祝儀重配覚帳	天保 11 年霜月 14 日	新井 隆夫
20	お宮参りの家族	（平成 5 年 12 月撮影）	於：姫宮神社
21	ウラ浅間の親子	（平成 16 年 6 月 30 日撮影）	於：和戸浅間神社
22	初誕生と一升餅	平成 11 年	中村 佐登志
23	七五三で参拝する姉妹	（平成 4 年 11 月撮影）	於：姫宮神社

結婚の風景

一組の男女が出逢い、結婚に至るまでの経緯^{けいゐ}が多種多様で自由かつ個性的な面を持つ現在と比較をすれば、昭和20年代より前の結婚は、男女の思いよりもそれぞれの家（家族）の存在が重視される傾向^{けいこう}にあり、そのために見合いによる結婚がほとんどで、恋愛による結婚は少なかったようです。結婚に至るまでの経緯も、現在と比較すれば自由さはほとんど無かったといえますが、生活の基盤^{きばん}である家（家族）が、家長^{かちょう}を中心に結束をしていかなければ、衣食住という生活のあらゆる面において、すぐに大きな支障がでてしまうことになるので、家の繁栄^{はんえい}に直結する「結婚」は、それぞれの家にとって重要な節目であったといえます。

この「結婚」という重要な節目を迎えるにあたっても、いくつかの儀礼^{ぎれい}があります。お見合い、タリイレ（樽入れ^{ゆいのう しゅうぎ}）、結納、祝儀（結婚式）などが主なものです。現在でも行われているものがほとんどですが、それぞれの行われ方が現在では多種多様になっています。時期も、かつては農閑期^{のうかんき}にあたる時期（11月から2月頃）に行われることが多かったそうです。

今でもそうですが結婚式などの華やかなお祝いは頻繁^{ひんばん}にあることではなかったのも、祝儀（結婚式）が行われる様子を見たり、花嫁の衣装や持参品などを見たりするのは、同じ地域に住む人々にとって大きな楽しみのひとつであったそうです。

30.



31.



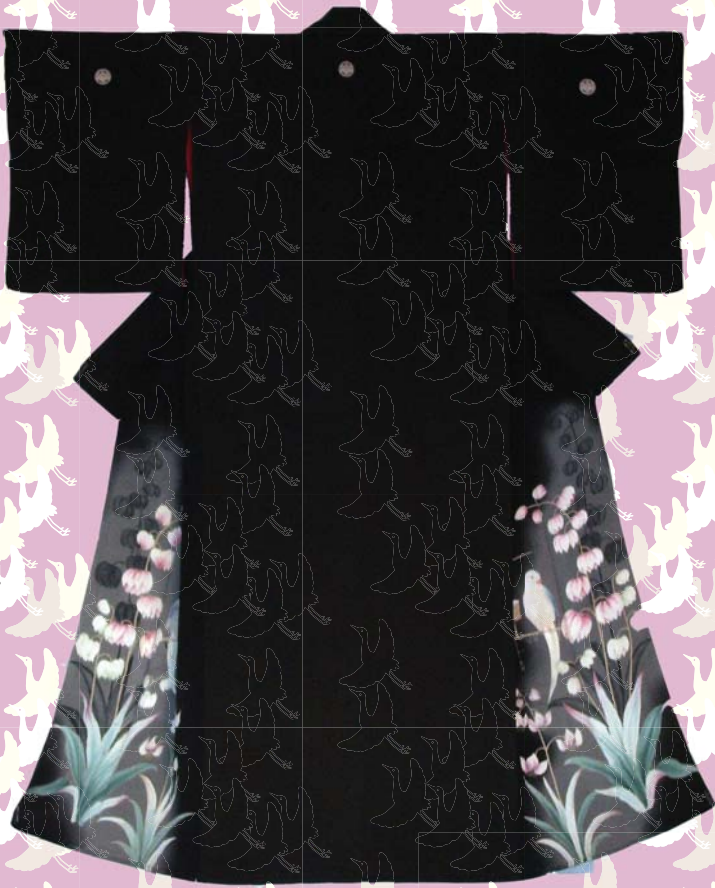
	資料名	年 代	寄贈者
24	結納目録	明治 16 年 1 月 23 日	新井 隆夫
25	結納返し目録	明治 16 年 1 月 23 日	新井 隆夫
26	美弥婚礼諸入用覚帳	嘉永 4 年 亥 2 月 27 日	新井 隆夫
27	花嫁衣装（白無垢）	昭和 30 年代	中村 清子
28	花嫁衣装（江戸袷）	大正時代	金子 和生
29	花嫁衣装用 帯	大正時代	金子 和生
30	祝儀の盃（大小一組）	昭和 30 年	中村 多計志
31	角樽		成田 良夫
32	下駄（アトマル）		岡本 とし子
33	角隠し		中村 忠男
34	ハコセコ		中村 忠男
35	婚礼写真		新井 隆夫
36	婚礼写真		小島 雅郎

はなよめいしやう へんせん
花嫁衣装の変遷

昭和の始め頃まで、花嫁の衣装は白無垢の
上^{うへ}に茄子紺^{なすこん}などの地色^{かもん}に家紋^{けもん}が付いた無垢^{しろむく}の
着物^{きもの}を着用する「襲^{かさね}」が一般的でした。展示
しているような、江戸^{えど}裾^{すそ}と呼ばれる裾模様^{すそよう}のある紋付^{もんぷき}を着るのは財産家^{ざいさんか}の花嫁といわれま
した。終戦^{しゅうせん}後^ごには、肩・袖・裾に模様^{もよう}の入^いった振り袖^{ふりそで}を着るようになり、色使い^{いろつかい}やデザイン^{でざいん}
なども華やか^{こうか}で豪華^{ごうか}なものになっていきま
した。

現在^{げんざい}では、自宅で結婚式^{けっこんしき}を行うことも少な
くなり、ウェディングドレスなどを着用する
人も増えましたので、このような和装^{わさう}の花嫁
衣装^{いさう}を自前^{みづかみ}で用意^{ようい}する人もほとんど無^なく
なりました。

28.



34.



33.



27.

32.



葬送の風景

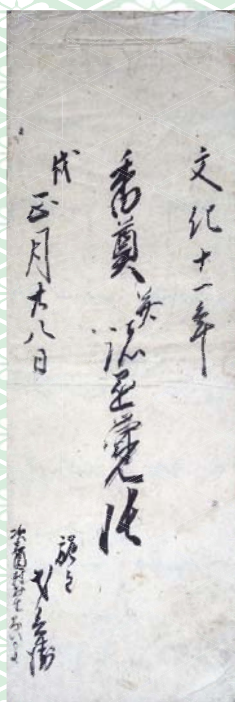
現在は、住宅事情など諸般^{しよはん}の理由から、葬祭場^{そうさいじょう}において葬儀^{そうぎ}が行われることも多くなってきました。しかし、葬祭場などが無かった時代には、葬儀は主に自宅において行われました。葬儀の運営も隣組^{となりぐみ}などの地域住民が役割分担をし、葬儀の際に必要なものを準備したり、遺体^{いたい}の埋葬^{まいそう}に関する作業を行ったりなど、さまざまな面で隣人など地域住民の協力を得ながら行われました。

現在は火葬をしますが、かつて土葬をしていた頃は、葬儀の流れの中で特に近所^{はかあな}の家々に協力を得て埋葬をおこないました。墓穴^{はかあな}を掘るなどの役割はロクドウ（六道）と呼ばれ、男性がつとめるものとされていました。墓穴^{はかあな}を掘り、棺^{ひつぎ}を墓地^{ぼち}に運び埋葬するのが主な役割で、地域においてつとめる順番が決められていました。

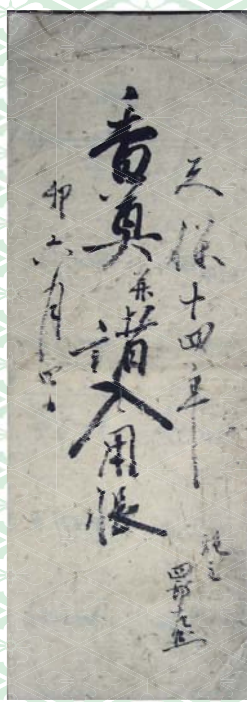
このように、人は生まれたときから亡くなったあとまで、家族だけでなく地域の人々に見守られ、助力を受けながら、その人生を送るといえるでしょう。

またこの頃の喪服^{もふく}は、男性の場合は黒羽二重^{くろはふたえ}の紋付^{もんつき}もしくは平絹^{ひらぎぬ}の縞^{しま}の襲^{かさね}に羽織袴^{はおりはかま}を、女性の場合は白無垢^{しろむく}の襲に白い帯^{きんしんしゃ}を着用していました。近親者^{しんせき}や親戚^{しんせき}以外の一般^{かいそうしや}の会葬者は、白以外を着ていたそうです。しかし年号が昭和になった頃から次第に白無垢から黒無垢へと変わっていき、戦後は一般の会葬者も含めて黒い喪服が一般的になっていきました。

	資料名	年 代	寄贈者
37	シシテンゲ（複製）		戸田 義一
38	香典並諸懸覚帳	文化 11 年正月 28 日	新井 隆夫
39	香典並諸入用帳	天保 14 年 6 月 4 日	新井 隆夫
40	白無垢		高畑 博
41	葬列の順序		新井 隆夫



38.



39



37.

発行：宮代町郷土資料館

〒 345-0817

埼玉県南埼玉郡宮代町字西原 289 番地

TEL 0480-34-8882

FAX 0480-32-5601

<http://www.town.miyashiro.saitama.jp>